

ダニエル書 - 第六十号

ダニエルの祈りと第八の王国の秘密：終末の啓示

Jeff Pippenger

2024-01-24

ヨハネの黙示録の第17章と第18章では、天使がヨハネに教皇制の裁きの幻を示す。その最終的な裁きの描写の中で、聖書の預言に登場する諸王国が表されている。

そして、ここに知恵ある者の思いがある。七つの頭は、女が座っている七つの山である。また、七人の王がいる。五人はすでに倒れ、一人は今いる。もう一人はまだ来ていない。やがて彼が来るときには、短い間だけとどまらなければならない。そして、かつてはいたが今はいない獣は、八番目であり、七人のうちの一人でもあり、滅びに至る。
黙示録 17:9-11

ヨハネは霊において1798年に連れて行かれ、そこで、教皇制の女を載せていた獣の七つの頭は七人の王であると教えられた。王は王国を指し、聖書の預言では王国もまた頭を表す。1798年の時点で、五つの王国はすでに倒れ、一つが当時支配していた。第七の王国はまだ将来のことで、それは十人の王によって表されていた。その後ヨハネは、第八の王国は七つのうちから出た教皇制の獣であると知らされた。教皇制は第五の王国であり、致命的な傷を受けていたので、その致命的な傷が癒される時、それは七つのうちに属する第八の頭となる。

ダニエル書2章では、最初の四つの王国はバビロン、メディアとペルシャ、ギリシャ、ローマである。それら四つの文字どおりの王国は四つの霊的な王国も表しており、それらを合わせると、黙示録17章の八人の王、すなわち頭が特定される。イエスは常に、物事の始まりをもってその終わりを示されるからである。ダニエル書2章は聖書の預言における王国の最初の言及であり、黙示録17章は最後の言及であるゆえ、両者は一致しなければならない。神は決して変わらないからである。

1798年に倒れた第五の王国は、霊的バビロン、すなわちローマ教皇制であった。1798年に権力を握っていた第六の王国は、二本の角を持つ王国であり、メディアとペルシャの二本の角を持つ王国によって象徴されていた。第七の王国は十人の王から成り、1798年にはまだ到来していなかったが、それは世界統一政府であり、アレクサンドロス大王の世界統一政府であったギリシャによって象徴されていた。七つに属する第八の頭は、致命的な傷を負った第五の王国であり、その致命的な傷が癒やされたときに再び生きた。

大淫婦の裁きは、日曜法の危機の「時」に起こる。すなわち、それはアメリカ合衆国における日曜法に始まり、恩恵期間が閉じられるまで歴史を通じて続く時期のことである。その「時」は、ダニエル書では「これらの王たちの時代」として示されており、その時に神はご自分の御国を打ち立てられる。その「時」には、後の雨が注がれている。

後の雨は清い者たちの上に降ろうとしている——そのときには皆、以前のようにそれを受けるだろう。

「四人の天使が手を放すと、キリストは御国を打ち立てられる。できる限りのことをしている者だけが後の雨を受ける。」スポールディングとマガン、3。

後の雨の注ぎは段階的である。というのも、それは裁きに対応しており、裁きは段階的に進むからである。ミラー派の人々は、自分たちがダニエル書2章の像の足の部分の時代に生きていると理解していた。彼らはローマが地上の最後の王国であると信じており、それは正しかったが、彼らの理解には限界があった。

「これらの王たちの時代」は、ローマという王国の歴史において確かに見られるが、それは異教ローマや教皇ローマの歴史ではなく、現代ローマの歴史である。ミラー派の人々は、異教ローマと教皇ローマを一つの王国として扱い、その理解を裏づけるために、ユダの最後の王（ゼデキヤ）に関するエゼキエル書の一節を用いた。

そして、おまえ、イスラエルの不敬で邪悪な君主よ、不義が終わりに至るその時に、おまえの日は来た。神である主はこう言われる。頭飾りを取り去り、冠を脱がせよ。事はもはや同じではない。低い者を高くし、高い者を低くせよ。私はそれを覆し、覆し、覆す。それは、正当にそれを有する者が来るまで、もはやない。私はそれを彼に与える。エゼキエル 21:25-27。

ゼデキヤ以来、「覆される」三つの王国が現れ、それらは、統治する「正当な権利を持つ」キリストへとつながっていく。バビロン、メディア・ペルシア、そしてギリシャはことごとく覆され、その後にローマの王国が成立する。そしてその第四の王国の歴史のただ中に、キリストが来て王国を打ち立てられる。キリストはまさにそのことをなされた。

国を急速に滅亡へと導いていた者たちの最たる者は、彼らの王ゼデキヤであった。預言者を通して与えられた主の勧告をことごとく捨て、ネブカドネツアルに負っていた恩を忘れ、イスラエルの神、主の名によって立てた厳粛な忠誠の誓いを破り、ユダの王は預言者に対し、恩人に対し、そして自らの神に対して反逆した。自らの知恵のうぬぼれにより、イスラエルの繁栄にとって古くからの敵に助けを求め、「エジプトに使者たちを遣わし、馬と多くの兵を与えてもらおうとした」。

「『彼は栄えるだろうか』と、主は、このように卑劣にもすべての聖なる信義を裏切った者について問いかけられた。『このようなことをする者が、のがれ得ようか。契約を破って、救い出されようか。わたしは生きている、と主なる神は言われる。彼を王とした王が住むその所——彼がその王の誓いを侮り、その契約を破った——その王のいるバビロンのただ中で、彼は必ず死ぬ。強大な軍勢と大いなる群勢をもつファラオも、戦いにおいて彼のために何の助けにもならない。... 彼は手を差し出して誓い、これらすべてのことを行いながら、契約を破って誓いを侮ったのだから、彼はのがれることはない。』エゼキエル書 17:15-18。」

「『冒瀆の邪悪な君主』に、最終的な清算の日が来た。『宝冠を取り去れ』と主は宣告し、『冠を脱がせよ』と命じられた。キリストご自身が御国を打ち立てられるまで、ユダに再び王が許されることはなかった。『わたしはそれを覆す、覆す、覆す』—これはダビデの家の王座に関する神の勅令であった—『そしてそれは、権利を持つ方が来るまで、もはや存在しない。わたしはそれをその方に与える。』エゼキエル書21章25-27節。」『預言者と王たち』450、451頁。

ミラーは正しかったが、その理解は限られていた。というのも、キリストが人々の間を歩まれたときに打ち立てられた御国は、最終的な地上の王国ではなかったからである。異教ローマの王国の後には、なお四人の王が現れることになっていた。しかし、キリストは十字架において「恵み」の御国を確かに打ち立てられた。だが、その御国は黙示録17章の十人の王たちの日に打ち立てられたのではなく、また「後の雨」の時期に打ち立てられたのでもない。終わりの時代にキリストが打ち立てる御国は、「栄光」の御国である。ホワイト姉妹は、これら二つの御国について直接語っている。

ミラー派は、第四の王国の歴史においてキリストが王国を打ち立てられたと理解しており、その点では正しかったが、理解は限定的であった。第四の王国の歴史において、キリストは「恵み」の王国を打ち立てられ、第八の王国の歴史においては「栄光」の王国を打ち立てられた。「恵み」の王国を打ち立てられたその歴史において、聖霊はペンテコステで注がれた。ペンテコステは、彼が「栄光」の王国を打ち立てられる歴史における「後の雨」の注ぎを象徴している。

ペンテコステのメッセージは、キリストの文字通りの復活のメッセージであった。後の雨のメッセージは、少なくとも一部において、「七つに属する第八」という預言的な謎によって示され、獣において成就し、また地から上って来る獣の二本の角にも表されている、象徴的な復活のメッセージである。第四の王国と第八の王国は、キリストがその御国を打ち立てられるところである。

主の名によって弟子たちがなした宣言は、あらゆる点で正確であり、彼らが指し示していた出来事はその時すでに起こりつつあった。「時は満ち、神の国は近づいた」—それが彼らのメッセージであった。「時」—すなわち、メシア、「油注がれた者」に至るまでとされたダニエル9章の六十九週間—が満了したとき、キリストはヨルダンでヨハネから洗礼を受けたのち、聖霊の油注ぎを受けられた。そして、彼らが間近だと宣言した「神の国」は、キリストの死によって打ち立てられた。この御国は、彼らが信じるよう教えられていたような地上的な帝国ではなかった。また、それは、「いと高き方の聖徒たちの民に、天の下のすべての国の国と主権と、その国の偉大さが与えられる」ときに打ち立てられる、将来の不滅の御国でもなかった。すなわち、「すべての権勢が彼に仕え、彼に従う」永遠の御国でもない。（ダニエル書7章27節）聖書において「神の国」という表現は、恵みの御国と栄光の御国の双方を指すために用いられている。恵みの御国は、ヘブル人への手紙においてパウロによって示されている。「私たちの弱さに同情してくださる」あわれみ深いとりなし手であるキリストを指し示したのち、使徒はこう言う。「それゆえ、あわれみを受け、恵みを見いだすために、恵みの御座に大胆に近づこう。」（ヘブル4章15、16節）恵みの御座は恵みの御国を表している。御座が存在するという事は、御国が存在することを意味するからである。キリストは多くのたとえにおいて、「天の御国」という表現を用い、人の心になされる神の恵みの御業を指し示しておられる。

このように、栄光の御座は栄光の御国を表している。そしてこの御国については、救い主の言葉にこうある。「人の子がその栄光を帯びて来るとき、すべての聖なる御使いたちを従えて来られる。そのとき、彼はその栄光の御座に着き、その前にすべての国々が集められる。」マタイ 25:31, 32. この御国はまだ将来のものである。キリストの再臨まで、それが打ち立てられることはない。

恵みの御国は、人類の墮落の直後、罪ある人類を贖う計画を立てられたときに設けられた。そのときそれは、神の御旨のうちに、また神の約束によって存在しており、信仰によって人はその御国の民となることができた。だが、それが実際に確立されたのは、キリストの死に至るまでではなかった。救い主は地上での御使命に入られた後でさえ、人々の頑なさや恩知らぬ態度に疲れ果て、カルバリーの犠牲から身を引かれることもあり得た。ゲツセマネにおいて、苦しみの杯はその御手の中で震えた。そのときでさえ、額の血の汗をぬぐい、罪ある人類をその不義のうちに滅びるに任せることもできたのである。もしそうなら、墮落した人類に贖いはあり得なかった。しかし、救い主が御いのちを委ね、息絶えんとするその息で「成し遂げられた」と叫ばれたとき、贖いの計画の成就是確証された。エデンで罪に陥った二人に与えられた救いの約束は、そこで確証された。こうして、これまで神の約束によってのみ存在していた恵みの御国は、そのとき確立された。

このように、キリストの死-弟子たちが自分たちの希望の最終的な破滅と見なしていたまさにその出来事-こそが、その希望を永遠に確かなものとしたのである。彼らに残酷な失望をもたらした一方で、それは彼らの信仰が正しかったことを決定的に証明する頂点となった。彼らを嘆きと絶望で満たした出来事は、アダムのすべての子孫に希望の門を開き、また、あらゆる時代における神に忠実なすべての者の将来のいのちと永遠の幸いがかかっていたのである。

無限のあわれみのご計画は、弟子たちの失望を通してさえ成就に至ろうとしていた。『かつていかなる人も語らなかつたように語られた』主の教えに示された神の恵みと力によって彼らの心は勝ち取られていたが、イエスへの愛という純金の中にも、世的な誇りと利己的な野心という卑しい混じり物が交じっていた。すでに彼らの主がゲツセマネの陰りに入りつつあったあの厳粛な時、過越の客間においてさえ、彼らの間には「だれが一番偉いとされるべきか」という争いがあった（ルカ22:24）。彼らの視界は玉座と冠と栄光で満たされており、目の前には園での辱めと苦痛、法廷、カルバリーの十字架が横たわっていたのに、彼らの心の誇りと世の栄光への渴望こそが、当時の誤った教えにこれほどまでに固執させ、御国の真の性質を示し、ご自身の苦難と死を指し示す救い主のことばを顧みないままにさせたのである。そしてこれらの誤りは、彼らを矯正するために許された、痛烈ではあるが必要な試練を招くことになった。弟子たちは自分たちのメッセージの意味を取り違え、期待は実現しなかったが、それでも彼らは神から与えられた警告を宣べ伝えていたのであり、主は彼らの信仰に報い、その従順を重んじられるであろう。彼らには、よみがえられた主の栄光の福音を万国に告げ知らせる務めが委ねられることになっていた。彼らをこの務めに備えるためにこそ、彼らにはあまりにも苦く思われたあの経験が許されたのである。『大争闘』347、348

黙示録において、「知恵のある心」は「人の数」を数え、その「人」が七つに属する第八の王国でもあることを理解する。「罪の人」は、地の王たちと商人たちを支配する第八の王国の頭であって、迫害のそしりを避けるために七つの教会が彼と結び、また多くの水の上に座している者である。

そして彼は私に言った。「あなたが見た、淫婦が座している水は、もろもろの民、群衆、諸国、諸言語である。」ヨハネの黙示録 17:15.

「罪の人」は、政治、金融、宗教、そして市民社会の世界を支配し、獣とその像、その刻印、その名の数に打ち勝った者たちを除くすべての人々をも支配する。

そして私は、火が混じったかのようなガラスの海を見た。さらに、獣とその像とその刻印とその名の数に打ち勝った者たちが、神の豎琴を手にして、そのガラスの海の上立っていた。彼らは神のしもべモーセの歌と小羊の歌を歌って言った。「全能の主なる神よ、あなたのみわざは偉大で驚くべきもの。あなたの道は正しく真実です、聖徒たちの王よ。」黙示録 15:2、3。

「イエス・キリストの啓示の封印が解かれるときに『知識が増すこと』を悟る『賢い者たち』とは、『悟り』を持ち、さらに『獣の数を数える。というのも、それは人の数であり、その数は六百六十六である』者たちのことである。その『悟り』は、イエスが預言の封印を解くときに必ず伴う三段階の試練過程の一部を表している。だからこそ、彼らが『彼の名の数』に『勝利を得た』と記されている。」

勝利を得るとは、試しを乗り越えることだ。そして「賢い」者で「悟る」者は、666という数に結びついた勝利を得る。また、その一節は王国が八つあり、八番目は七つから出たものであることも示している。その「秘密」はダニエル書第2章に示されている。というのも、ダニエルの祈りはその「秘密」を悟るためのものだったからである。すなわち、王国が八つあり、八番目の王国は七つに属し、その王国の数が666であるという啓示こそが、ダニエルが祈りによって得たとされる「秘密」であり、ダニエルは神の終わりの日の「賢い」者たちを代表している。

ダニエルは、終わりの時の「賢い者たち」を表しており、彼らにはダニエル2章の奥義の封印が解かれている。そして、聖書預言の王国に関する最後であり最初の言及とは、その像には八つの王国があるという啓示である。その啓示は、ミラー派のダニエル2章の理解を支持するが、ひとたびそれが認識されると、十倍に明るく輝く。その十倍の輝きは、「賢い者たち」が勝利を得る試練を表している。というのも、七つに属する第八の王国は、竜と獣と偽預言者の三者連合である第六の王国でもあるからである。このように、竜と獣と偽預言者は皆、第六の王国であり、合わせて666を表している。

ネブカドネザルはダニエル書第二章の啓示によって試され、その試練に失敗した。ダニエル書第二章では、ダニエルは像の奥義に関する試練を乗り越える「知恵ある者」を表している。第三章のネブカドネザルは、その同じ試練に失敗する悪しき者を表している。ネブカドネザルは第一の王国の最初の王として、最後の王国の最後の王を象徴する。ゆえに彼は、「罪の人」、すなわち七つの教会が取り上げる預言上の人物を表している。人は第六日に創造されたので、六という数は人類の数である。ネブカドネザルの数は六である。ネブカドネザルは666という数の試練に失敗し、終わりの日の悪しき者を表した。罪の人の象徴として、彼の数は六である。

ネブカドネツアル王は金の像を造り、その高さは六十キュビト、幅は六キュビトであった。彼はそれをバビロン州のデウラの平地に立てた。ダニエル書 3:1。

その金の像は高さ六十キュビト、幅六キュビトで、その数が六であるネブカドネザルによって造られた。第二章の像の光に対する反逆としてその像は立てられ、像についての三

重の描写は、ネブカドネザルの数が六であることを理解すると、六、六、六に等しい。
次回の記事でこの研究を続けます。

地上の諸国がその武力の前に立ち向かうことができなかつた強大な王にとって、帝国と永遠に続くべき王朝を打ち立てるとする思いは、きわめて強く心を惹きつけた。限りない野望と利己的な誇りから生まれた熱狂をもって、彼はそれをいかに実現するかについて賢者たちと協議に入った。大いなる像の夢に結びつく驚くべき摂理を忘れ、また、イスラエルの神がその僕ダニエルを通して像の意味を明らかにされたこと、さらにこの解釈に関連して国の重臣たちが不名誉な死を免れたことも忘れ、自らの権力と覇権を確立したいという欲望以外のすべてを忘れて、王とその国政の顧問官たちは、あらゆる手段を尽くしてバビロンを至高のものとして高め、普遍的な忠誠に値するものにしようと決意した。

神が地上の諸国民に対する御計画を王と民に明らかにされたその象徴的表現は、今や人間の権力を栄えさせるために用いられようとしていた。ダニエルの解釈は退けられ、忘れ去られようとしていた。真理は曲解され、誤用されようとしていた。天によって人々の心に将来の重要な出来事を明らかにするために備えられたその象徴は、神が世界が受け取れることを望まれた知識の広まりを妨げるために用いられようとしていた。このようにして、野心的な人間たちの企てを通して、サタンは人類に対する神の御計画を挫こうとしていた。人類の敵は、誤りの混じらない真理が救いをもたらす強大な力であることを知っていた。だが、それが自己を高め、人間の企てを推し進めるために用いられるときには、悪の力に変わることも知っていた。

彼の豊かな宝蔵から、ネブカドネツアルは巨大な金の像を作らせた。それは、その材質という一点を除けば、幻の中に見られた像と概して似通っていた。異教の神々の壮麗な表象に慣れ親しんでいたとはいえ、カルデヤ人も、この燦然たる像ほど堂々として威厳に満ちたものを、これまで作り出したことはなかった。高さは六十キュビト、幅は六キュビトであった。そして、偶像礼拝が普遍的に行き渡っていた地であって、バビロンの栄光とその壮麗さと力を表すドウラの平原のこの美しく値の付けようのない像が、礼拝の対象として奉獻されたとしても、不思議ではない。そこでそのための手筈が整えられ、奉獻の日には、すべての者が像の前にひれ伏すことによってバビロンの権力に対する至上の忠誠を示すべし、との勅令が発せられた。『預言者たちと王たち』504、505頁。